



血の狩人

勝目梓

長編ハードボイルドオレックス

かきうと

KOBUNSHA
BUNKO



光文社文庫



光文社文庫

長編ハードバイオレンス

血の狩人

著者 勝目 梓 かつ め あずさ

1988年3月20日 初版1刷発行
1990年5月15日 8刷発行

発行者	大坪昌夫
印刷	大日本印刷
製本	大日本製本

発行所 株式会社 光文社

〒112-11 東京都文京区音羽2-12-13

電話 東京 03 (942) 2241(代表)

振替 東京 6-115347

© Azusa Katsume 1988

落丁本・乱丁本はお取替えいたします。

ISBN4-334-70702-5 Printed in Japan

文社文庫

長編小説ハイオレンス

血の狩人

勝目 梓



光 文 社

目次

一章 懲戒免職

5

二章 触覚

44

三章 閉ざされた夜

78

四章 鬼心

110

五章 抗争の街

144

六章 待ち伏せ

191

七章 触手

247

八章 首

285

解説

尾崎秀樹

323

一章 懲戒免職

1

クリスマス・イブの夜だった。

白のリンカーンコンチネンタルが停^とまった。銀座七丁目のキャパレー、"サンタモニカ"の前である。

リンカーンコンチネンタルにつづいて、シルバークレーのクライスラーが、並んで停^とまった。
"サンタモニカ"のボーイが、二台の車にそれぞれ歩み寄ってきた。

リンカーンコンチネンタルのリアシートから、男が降り立った。ダークスーツを着ていた。
男は大きく開けたドアの端に手をかけて立った。小さく足を開いた恰好^{かっこう}だった。

つづいて車から、茶色のダブルのスーツを着た男が降りてきた。小柄な中年の男だった。短い髪にわずかに白いものが混じっていた。

うしろのクライスラーからも、四人の男が降りてきた。男たちは、茶色のダブルのスーツの男を囲むようにして、「サンタモニカ」のドアの奥に消えた。

一ブロック離れた角で、タクシーが停まっていた。客は若い男だった。男は、運転手が釣り銭を用意する間、ずっと「サンタモニカ」の入口に眼を投げていた。険しく光る眼だった。

タクシーを降りると、男はスーツの裾^{すそ}を引っばって、着崩れをなおした。コートは着ていなかった。サイドベンツのスーツの腰のところ^{すそ}が、わずかにふくれていた。

男は、ゆっくりと歩道を進んだ。そのまま彼は、「サンタモニカ」の中に入った。

「サンタモニカ」では、ショーがはじまっていた。白人と黒人の女二人が、ヌードで踊っていた。二人とも、ひきしまった美しい体だった。むきだしの乳房が、張りの強そうなはずみ方をしていた。長い足と体が、軽やかにはずみ、しなつた。肌はだに小さく汗が光った。

ステージの正面に、リンカーンコンチネンタルと、クライスラーから降り立った男たちがいた。彼らは、並んだ広い席を占めていた。ホステスたちが、男の膝ひざに片手を置いている。テーブルには、レミーマルタンのボトルが出ていた。

茶色のダブルのスーツの男は、半円形のソファの真ん中に坐っていた。ホステスが左右から、男に体を寄せかけていた。男は両腕を左右の女たちの腰に回し、尻をさすっていた。

ステージから離れた壁ぎわの席に、一人で飲んでいる客がいた。

三十近い年恰好の、体格の立派な男だった。濃いグレーのスリーピースにブラックタイとい

う姿だった。髪が短く、眉がくつきりと濃い。眼はするどかった。さっきまで、ホステスが横についていたのだが、今はいない。茶色のダブルのスーツの男たちの席に、呼ばれて行ったのだ。

明美^{あけみ}という名のホステスだった。ボーイに呼ばれて席を立つとき、明美はかすかに眉を寄せた。客が見咎^{とが}めて訊^きいた。

「いやな客なの。内海組^{うちみぐみ}の組長……」

明美は客の耳に囁^{ささや}いて、離れた。

一人になると、客はほの暗い店内を見まわした。酔った眼つきではなかった。

ボーイが客を案内して、通路に現われた。さっき、一ブロック離れた角でタクシーを降りた若い男だった。男は、中ほどの席に案内されていった。

グレーのスーツの男は、席を立ててトイレに向かった。

用を足しているとき、うしろでドアが開いた。彼はふり向いた。たったいま、ボーイに案内されて、中ほどの席に着いたばかりの男だった。男は、さし迫った険しい眼のまま、大便所に消えた。体をひねって、彼はドアを閉めた。サイドベンツの服の裾が小さくあおられた。服の裾の下に、一瞬、拳銃のグリップがのぞいた。拳銃が腰のベルトにはさまれていたのだ。

用を足していた彼は、それをはっきりと眼に留めていた。ドアの向こうで、ベルトをはずし、ジッパーをおろすかすかな音がした。

彼は、用を足して、トイレを出た。席にもどると、彼はショートピースに火をつけた。思案する顔になっていた。

拳銃を持っている男が、トイレからもどってきた。彼は、ショートピースを灰皿でもみ消した。

不意に怒号が湧いた。グレーのスーツの男の横の席で、喧嘩がはじまったのだ。客同士だった。どっちも三十前後の男たちだった。

一人が突きとばされて、彼の席に倒れこんできた。小さなテーブルが倒れた。グレーのスーツの男の膝に、酒がこぼれた。

彼はゆっくりと立ち上がった。眼の前に、喧嘩の片割れが、眼を吊り上げて立っていた。彼は、突きとばされて倒れた男の腰を蹴った。一瞬の後には、喧嘩の片割れのほうも、吹っ飛ばされていた。グレーのスーツの男の拳が、男の腹と頸に打ち込まれていたのだ。動きはすばやく、的確だった。

ホステスが悲鳴をあげた。ボーイがとんできた。客が総立ちになった。ステージのダンサーたちの動きが、曖昧になった。

喧嘩をはじめた二人が立ち上がり、グレーのスーツの男に詰め寄った。二人は、レミーマルタンのびんを手を持った。一人がテーブルの角でびんを割った。ささくれたびんの割れ目が、するどく光った。

「やめたほうがいい、おれに手を出すとは怪我をするぞ。」

グレーのスーツの男が、低い穏やかな声で言った。表情も静かだった。

「どっちが怪我するんだ。この野郎！」

割れたびんが矢のように突き出された。グレーのスーツの男が上体を横に傾けた。右足が風を切って伸びた。割れたびんを持った男の肋骨がきしんだ。男は重いキックをくらって、たたらを踏んだ。踏みとどまれずに、通路に這った。

もう一人の男が、レミー・マルタンのびんを振り上げた。男の眼には気後れがあった。

怒声とともに、びんが打ちおろされた。彼は、横に体を開きながらそばのソファを引き倒した。びんを持った男は、倒れたソファに足をとられて、つんのめった。彼のキックが、速射砲の連射のように二発つづいた。一発は相手の脇腹にめりこんだ。一発はこめかみだった。

「やめろ、てめえら！」

人垣の中から声が飛んだ。声の主が、客やホステスを分けて、前に出てきた。内海組の組長に付いていた男の一人だった。グレーのスーツの男は、制止の声を無視した。最初に床に倒れた男を引き起こし、拳を顎に打ち込んだ。男の体が吹っこんで、内海組の男にぶつかった。

「てめえ！」

内海組の男が血相を変えた。彼は無造作にグレーのスーツの男に詰め寄った。拳が飛んだ。グレーのスーツの男は、その拳を手で払うと同時に、足をとばした。内海組の男は、脛を蹴ら

れてうめいた。上体が前に折れた。そこに強烈な膝蹴りが飛んだ。膝は男の頸を突き上げていた。男はうめいて床に這った。

銃声がひびいたのは、そのときだった。また悲鳴が上がった。いくつもの怒声と、荒い足音が悲鳴を掻き消した。ステージからショードンサーの姿が消えていた。銃声はつづけて二度ひびいた。客とホステスたちが、一斉に壁ぎわに走って逃げた。

「一一〇番するんじゃねえぞ！」

誰かが叫んだ。内海組の組長が床にころがっていた。

通路を銃を持った男が、出口めがけて走り出した。グレーの男が、ブランデーのびんをつかんで、男めがけて投げた。びんは男の眼のすぐ横に当たって碎けた。酒と血が飛んだ。

男が走りながら、グレーのスーツの男に拳銃を向けた。グレーのスーツの男が、腰を沈めた。同時に、小さなテーブルが、宙を飛んだ。

銃声とともに、拳銃を持った男の体が跳ねた。男は飛んできたテーブルに脛を打ちつけて、床に倒れた。

彼は、さらにテーブルをつかんだ。それを楯にして、彼は跳んだ。テーブルと、グレーのスーツの男の体が、一緒に拳銃を持った男の体の上になだれ落ちた。

テーブルの角が、拳銃を持った男の額を割っていた。グレーのスーツの男の手が、男の拳銃を持った手首をつかんでいた。そこに手刀が打ち込まれた。骨の碎けるにふい音がした。拳銃

をにぎった男の五本の指が、強くはねて伸びた。拳銃が手から離れて、短く床をすべった。

グレーのスーツの男ははね起きた。拳銃を拾った。つづいて銃を持っていた男が、立ち上がって逃げようとした。グレーのスーツの男の体が宙にはね上がった。鮮やかな跳び蹴りだった。男は突き刺さるようなキックを後頭部に受けて、膝から崩れ落ちた。

騒ぎはそこで終わった。はじめから終わりまで、二分あまりの出来事だった。それほど、グレーのスーツの男の動きは、無駄がなく、速かった。

内海組の組長は、肩口を撃たれていた。茶色のダブルのスーツが、小さく血で汚れていた。組員たちが、組長を抱きかかえ、囲むようにして、急いで出口に向かった。組員の三人は、組長を撃った男を引きずるようにして、外に連れ出した。残った組員の一人が、グレーのスーツの男に駆け寄った。

「組長が礼をしたいといっています。おれと一緒に来てください」

組員が言って、グレーのスーツの男の背中に手をあてた。グレーのスーツの男は、ゆるんだネクタイを直し、服の埃を払うと、大股で出口に向かった。

騒ぎの後とは思えないほど、店内は静まりかえっていた。客もホステスやボーイたちも、気を吞まれたまま、うつけたように立ちつくしていた。

外では、内海組の組長を乗せたリンカーンコンチネンタルが、タイヤをきしませて走り出していた。

組長を撃った男は、クライスラーのリアシートに押し込められていた。通行人は、まだ騒ぎに気付いていなかった。クライスラーに男が押し込められるのを見ても、酔っぱらいが世話を受けている、といったふうにしか見えなかった。血に汚れた顔は、つかまえている男たちに頭を押えられて伏せられていた。

クライスラーもすぐに走り出した。グレーのスーツの男に付いている組員は、急ぎ足に角を曲がって、裏道に向かった。グレーのスーツの男は、表情を殺した顔で歩いていた。歩きながら、彼はショートピースをくわえて、火をつけた。

内海組の組員が、強引にタクシーを停めた。彼は、タクシー乗場で乗ってくれという運転手に、一万円札をつかませた。一万円札と、ドスのきいた男の顔つきが、運転手を黙らせた。三十半ば、修羅場のいくつもをしのできたことをうかがわせる顔をした組員だった。

男はいいねいなことばつきと身ぶりで、グレーのスーツの男を、先にタクシーに乗せた。つづいて男も乗ってきた。

「大森に行ってくれ」

男は運転手に言った。

「名前を聞かせてくれますか……。あたしは内海組の若頭をつとめる田丸たまるつて者です」
車が走り出すと、組員が小声で言った。

「関敏彦……」

グレーのスーツの男は、ぶっきらぼうに答えた。

「素人さんしらとですね？」

「やくざは嫌いでね」

関敏彦は表情を動かさずに言った。田丸も表情は変えなかった。

「どういふご商売ですか？ 関さんは」

「無職だ。近く新しい仕事をはじめるつもりだけどね」

「何をはじめるんです？」

「調査事務所。興信所といったほうが通りがいいかもしれないな」

「好きなんですか？ そういう仕事が」

「好きじゃないが、ほかにやれそうな仕事もないんでね」

「ご経験がおりなんでしょう」

「ないよ」

「刑事の経験があるとか……。そんなふうに見えますな」

「刑事ねえ。そんなにおれは眼つきがわるいかい？」

関は笑った。田丸も短く笑った。

「どこに住んでらっしゃるんですか？」

「中野のほうだよ」

「組長が、くれぐれも礼を言つといてくれ、ということでした。関さんのお陰で、あの鉄砲玉野郎をとつかまえることができたんだ。どんなお礼をしてもしたらないぐらいですよ」

「おたくの組のためにやったんじゃないぜ。はずみであんなうちまっただけさ」

「それにしても、すごい腕だな。空手はかなりやったんでしよう？」

「二人組がはじめに喧嘩おっはじめただろう？ あれは八百長だぜ。気がついちゃいなかっただろうがね」

「八百長？」

「騒ぎを起こして、どさくさまぎれに、おたくの組長を殺ろうって吐だたんだらうな。騒ぎにまぎれてやったほうが、やりやすいし、ずらかりやすいからな」

「どうしてそうだとわかるんです？」

「二人組の喧嘩は、突然にはじまったんだ。おれの席のすぐ横だったからな。おれにはわかってたよ。喧嘩をはじめるまでは、二人は黙ってショーを見てたんだ。喧嘩をおっはじめるとタイピングも決めてあったはずだぜ。あの鉄砲玉が、トイレからもどってきて、すぐにおっはじめたんだからな」

「関さんは、どうして、あの二人組を相手にしたんです？」

「一人がおれのテーブルに倒れ込んできて、ズボンに酒をこぼしやがったんだ。かっとなっちまったからな」

「関さんも相当に気が短いようですね」

「そんなこともないんだが、相手がかかってきたからな」

「興信所なんかやらないで、うちの組に入らないかな、関さん。あなたは頼りになりそうだ」
「言っただろう。やくざは嫌いだってね」

「しかし、関さんのさっきの立ち回りは、やくざ以上に迫力があつたなあ」

田丸は笑って言った。

二人のやりとりは、終始、小声で交わされた。運転手の耳を気にしていたのだ。

2

大森の小さな待合の座敷だった。

関は上座に坐らされていた。芸者がびったりと横に付いていた。田丸があれこれ指図して、席を取りしきっていた。

その席に、内海組の組長、内海啓司うちみけいしがやってきたのは、一時間あまり後だった。席には、関と田丸と芸者のほかに、誰もいなかった。

内海の肩の傷はかすり傷だったらしい。病院で手当てを受けて、和服に着替えて、彼はその座敷にやってきた。